

小学校における教育実習生と教職大学院現職生との 双方向的な学び

Bidirectional learning between student teachers and teaching postgraduates

谷川 航 加藤 直樹
Wataru TANIGAWA Naoki KATO

東京学芸大学
Tokyo Gakugei University

東京学芸大学の教職大学院の学びの特色として、「大学院で理論を学び、教職専門実習や課題研究、演習を通じて、学校の中でその応用を図る」という「理論と実践の往還」が掲げられている。本稿では、現場での経験を積んできた教職大学院現職生が、学部の教育実習に関わり、理論と実践を往還させる中で、教職大学院現職生と教育実習生との間にどのような双方向的な学びが実現されるかの検証について述べる。

小学校教育、教育実習、授業観察、授業実践、授業分析

1. はじめに

近年、教育現場では団塊の世代の大量退職期を迎え、新規採用の教員数が年々増加している。また、教育現場を取り巻く様々な問題は複雑化しており、新規採用教員にもその責任は重くのしかかっている。小学校では採用者数が増加する一方で、学校を取り巻く様々な問題がメディアでも盛んに取り上げられ、教員の志望者は減少し、平成23年度を境に教員採用試験の倍率は低下に転じている。教育実習を終えた学部学生は採用試験に合格するとすぐに担任をもち、独り立ちしなければならない。新規採用教員にとって様々な教員の授業をしっかり参観できる機会は実質、教育実習期間中のみとなってしまっている。しかし、この実習期間中の機会も実習生任せになっていることが多く、振り返り等も十分になされておらず、授業観察が十分な学びへと発展していない問題がある。

一方、教職大学院では「現職教員を対象に、地域や学校における指導的役割を果たし得る教員等として不可欠な確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えたスクールリーダー（中核的中堅教員）の養成」を目的の一つとした教育が行われており、教職大学院の現職教員の学生（現職生）には、修了後、複雑化する教育現場に対応する新人教員を育成していくことが大きな役割の一つとして期待されている。

そこで我々は、教職大学院現職生に求められ

る力を育み、かつ教育実習生の学びを強化する方法として、学部学生の教育実習の指導に入ること提案し試行した。本稿ではその試みについて報告する。今回指導した学生は、筆者の派遣元の小学校で実習を行うこととなった東京学芸大学初等教育教員養成課程情報教育選修の学部4年生4人の教育実習生で、3週間の実習期間中に週に3、4回程度の支援を行なった。

2. 教育実習生への指導

今回の試みの中で、教職大学院における学びの5つの領域のうち「教科等の実践的な指導法に関する領域」について、現場での実践的な学びを展開できると考えた。具体的には、筆者の専門である国語科の指導法を実習生に伝えること、そして実習生が実践的な指導法を見て学ぶ授業観察を充実させることの2点である。

国語については指導法全般、指導者用デジタル教科書等のICT活用方法について実習生に指導を行なった。実習生が教育の情報化を専門とする学生であったためICT機器を扱うことには慣れており、教員に採用された後も自ら効果的な活用方法を考えられるよう、テクニックだけではなく、その根本となる基本的な考え方を伝えることも意識した。

最も力を入れたのは授業観察の方法である。教育実習中は授業実践に重きを置かれがちであるが、授業力向上には自身の授業実践とともに授業観察からの学びも大きく関係する。実習生

は実習期間中に様々な授業を観察するが、担当教員がそこに同行し、観察した授業について協議することは少ない。そこで、実習生と共に授業を参観し、ミニ協議会を行う中で、筆者が教職大学院で学んだ授業観察の理論について、教育実習という実践の場で伝えることを意識した。

3. 担当教員からの反応

教育実習は、担当教員と実習生の一対一の対応である。そこに、教職大学院の現職生が関わることで担当教員にどのような影響があるかを知るために、教育実習生の担当教員4名にアンケートを実施した。教職大学院生が入ることが良かったかを5点満点(1~5点)で評価した平均点は4.25であった。理由として、「1人の指導教官が指導するのでは、指導が偏るため」「教材研究がより深くできた。自分が知らないことを知ることができてよかった」等が挙げられ、多角的な指導や教材研究の深まりについて、肯定的に捉えられていることが分かった。また、授業観察への指導について「初任者にもしていただきたいような指導を丁寧にしていただいた」「行き届かないところまで指導していただいた」という意見があった。手薄になりがちな授業観察について、積極的に指導にあたった点を担当教員は肯定的に捉えていた。

4. 教育実習生の学び

実習生に対して、現職生が教育実習に関わることについてのアンケートを実施した。現職生のアドバイスの中で印象に残っていることとして「授業は教員一人一人の個性に基づいてなされていること」(1人)「授業参観の視点のあり方」(3人)「授業の展開、導入の引き付け方」(1人)等が上げられた。また、授業観察について、「教師の動きやノートだけでなく、子どもの表情や子ども同士の関わりに目を向けられた」「発言、ノート、行動を総括して見られるようになった」「事実だけでなく前後のつながりも見られるようになった」等の回答があった。自由意見として、「授業の見方がガラリと変わったので、これからの協議会が有効なものにできると思います」という意見もあった。

授業観察の指導については担当教員だけでなく実習生もその意義を感じていることがアンケートの結果からも明らかになった。実習生は実習当初、担当教員の指導法をできるだけ取り入れようと、教材の出し方や発問の仕方ばかりに気が向いていた。その後の授業をめぐる協議会

において様々な改善策が出されるものの、児童の実態に基づいた策ではないため議論が拡散しがちであった。そこで、観察の視点を具体的に伝え、共通理解した上で、実習生とともに授業観察を行った。初めは実習生になかなか意図が伝わらなかったため、児童の発言や動きと教師の所作のつながりを図式化して話したり、実際の観察記録を見せたり、授業観察に関する本を紹介したりする中で、実習生も教師の所作と子どもの反応とを一貫した流れの中で捉えることができるようになった。実習後半では児童の固有名詞が主語となり、「○○君は、この時~して、△△という発言をし、それに対して教員が…」という発言が増え、協議会での話し合いの様相にも変容がみられた。このような文脈をもった発言が増えると、単発の気付きではなく、授業が一つの流れとして捉えられるので、他の実習生にも考えが伝わりやすく、発言者自身の児童や授業の捉えも理解しやすいものとなる。

5. 現職生としての学び

現職生として筆者は、今回の実習支援を通して、授業観察の意義を再確認するとともに、それに伴う新人教育の重要性、教育実習の充実について学ぶことができた。今回の実習支援では、教職大学院生という立場を生かして、現場の教員の時にはできなかった「授業観察力」を実習生に伝えることができた。今後、スクールリーダーとして新人教員に授業観察の方法を意識的に伝えることで、彼らが一つ一つの授業からより多くのことを学び、自身の授業力向上につなげていくことが可能になると考える。

6. おわりに

教職大学院の現職生が、学部学生の教育実習に入り、授業観察への指導助言を行うことで両者がその意義を感じ、双方向的な学びを生じさせることができた。現職生が実習生の授業観察に対する指導の部分をフォローすることは、授業実践を主に指導する担当教員との指導の棲み分けを明確にすることにつながり、学部学生の教育実習での学びをより充実したものにすることができると明らかにした。学校現場がこのような新しい取り組みを積極的に行っていくことは、教育実習生および新人教員の確かな育成につながっていくと考えられる。